



特集 **ずっと、使いつづける。**



私たちの暮らしは、たくさんモノで溢れています。でも、これらのモノを使い捨ててばかりのライフスタイルは、地球の環境を悪化させてしまいます。そんな「ワンウェイ型ライフスタイル」から、なるべくごみを出さない（リデュース）、再利用する（リユース）、再利用する（リサイクル）、「3Rスタイル」へ。「ずっと、使いつづける」気持ちをムネに、生活を楽しみましょう。

写真／富田寿一郎

回収された使用済みの携帯電話。金、銀、銅、パラジウムなどの金属を取り出して、リサイクルすることが可能だ。

“2度目の人生”を生きるシャツ。

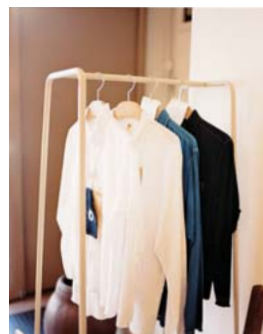
愛着のある服は、着られなくなってもなかなか捨てられないもの。そんな服を生まれ変わらせ、ずっと着続けるための取り組みを紹介します。



写真／トビタテルミ



染めかえ券付きのシャツも販売している。3回染めは淡めの青色に、6回染めは濃い藍色になる。「6」と刺繍のはいた、6回染めのシャツ。



上／染めかえが終了した服。素材や、染める回数によってさまざまな風合いが出る。

下／染めかえをするために、全国から送られてきた衣類。シャツだけでなく、スウェットやワンピース、ジャケットなどもある。

岡山の高城染工にある藍ガメ。温度管理のため地中に埋められているので、染めの仕事はとても手間のかかる重労働だ。



「白いステッチが染めた後に浮き出して、アクセントになるんです」と説明してくれる森藤大介さん。



エベベ(モリカゲシャツキョウト)
京都市上京区河原町通り
丸太町上ル榎屋町362-1
電話 075-256-4096
HP <http://www.ebebe.jp>



お気に入りだったけれど、着続けているうちに黄ばんでしまった白いシャツ。思いきって買ったはいけれど、微妙に流行遅れになってしまった柄物のトップス……。あなたのクローゼットにも、1着は「こやし」になってしまっている衣類があるのでは？ 思い入れがあるから捨てられない、そんな一枚に、「第二の人生」を与えることのできる場所が、京都にある。オーダーメイドやレディメイドのシャツを専門とするブランド、モリカゲシャツでは、2年前から、服を藍染めで染めかえる「ebebe(エベベ)」というエコデザインプロジェクトを始めた。この名前は、「いい服『ええべべ』を長く使い続けてもらいたい、という思いからつけられたもの。デザイナーの森藤大介さんは「もともと、モリカゲシャツでは襟がすりきれたり、カフスが破れたりしたシャツの修理を受け付けてきました。また、余った生地はどんな小さなものでもストックしておき、パッチワークやくるみボタンに使っています。そこからもう一歩踏み込んだのが、ebebeという活動です」と話す。きっかけは、シャツの縫製工場がある岡山県で、藍染め工房の高城染工の存在を知ったことだった。「その工房で、昔は村に藍ガメがあり、皆野良着を繰り返し染めかえて着ていた、という話を聞いたんです。藍には、防虫効果や、繊維を丈夫にする効果があると言われています。日本の生活に根ざしたものだ。藍を使って、服を使い続けるというのはすごく意味があるし、単純に面白い!と思いました」

実際に、お客さんの汚れてしまった服を染めかえてみたら、非常に好評だった。そこで、モリカゲシャツの製品に限らず、広範囲に染めかえを受け付けることに。今では、染めかえを希望する人から、月に50〜60枚の衣類が、全国から送られてくるようになった。素材や形によって染め上がり異なるため、服がどのようにな生まれ変わるかを待つ楽しみもある。

「昔の人が着物を最後は雑巾にしてまで使い続けたように、服を着続けていく、というのはすごく日本のなことだと思います。その伝統的なスピリットみたいなものが、改めて今の生活に根付いていけばいいな、と思っています」

3R生活の知恵。

ごみの減量や分別って、なんだか面倒そう……そんな風に考えがちなあなたに、環境省が選ぶ「3R推進マイスター」でもある、エコライフ・アドバイザーの和田由貴さんが、自宅でできるカンタン3R生活の知恵をレクチャーします。



卵パックはかさばるのでハサミで小さく切ります。お菓子の袋も、丸めてテープでピットとめてます。

写真／トビタテルミ



お買い物は、過剰包装のものを避け、シンプルな包装のものを。



紙類は、分別箱を置いてこまめに分別。

ごみ減量大作戦

まず、資源となる紙類は、分別箱を置いてこまめに分別します。チラシや封筒、両面使い切ってしまったコピー紙、洋服のタグ、トイレットペーパーの芯も。食品用ラップの箱も、金属部分を外して分別します。お菓子の袋のようなものは丸めて、卵パックのようなかさばるものは、ハサミを入れて、小さくして捨てるようにします。

ポイントは、分別箱やハサミなど、必要なものはすぐ手の届くところに置いておくこと。一般に、上手な収納のポイントは、日常でよく使うものはワン・アクションで取り出せる場所に置くことだと言いますが、分別や減量も同じ。習慣化できるようにしましょう。

あと、お買い物時の「選び方」は基本です。良く考えて長く使える良いものを買わないと。また、同じようなものがあつたら、過剰包装の商品は避けるようにしましょう。洗剤やお酢、サラダ油などは詰め替え用のものを買うようにすると良いですね。

生ごみ処理機にチャレンジ!

私の場合、家に生ごみ処理機を導入して、燃えるごみが大幅に減りました。燃えるごみの大半が生ごみだったのかな?というくらい。処理機にはコンポスト、乾燥式、バイオ式、ハイブリッド式(送風乾燥とバイオ処理を組み合わせたもの)など色々な種類があります。私は、電気代がかさまず、扱いが楽な、ハイブリッド式を使っています。生ごみは夏場は臭ったり大変なんですけど、機械を入れてずいぶん楽になりました。できた肥料は家庭菜園で使っています。



生ごみ処理機を使えば、生ごみが家庭菜園用の肥料に。

ケータイしよう

お出かけの時は、サーモスの携帯マグやスターバックスのポトルを持っていきます。お箸も、いらぬ布を使った自作の箸袋に入れてケータイしてますね。割りばしの削減になりますし、私は割りばしで食べたときの独特の「味」も苦手なので重宝しています。

マイバッグも欠かせません。女性の場合、ビジネスやお買い物など、

肩肘張らずに

仕事があつたり、家事もこなしたりと、今の人たちは何かと忙しいですよ。エコライフといってもあまり手間がかかりすぎると、なかなか続けることができません。あまり肩肘を張らずに、できることからチャレンジしていきましょう!



マイバッグ、携帯箸、携帯マグは、お出かけのときは忘れずに。



マンション一階のお庭では、枝豆、トマト、キャベツなどを今まで育ててきたそうです。



大判の風呂敷も重宝しているそうです。いろんな包み方をマスターする楽しみも。



和田由貴
1973年生まれ。「All About」節約・やりくりガイド、3R推進マイスター、省エネルギー普及指導員などをつとめ、エコライフや家事術についての講演、執筆、テレビ出演などで活躍中。小学6年生、2年生のお子さんのママでもある。
<http://wada-yuki.com>

何度も使おう、ペットボトル。

私たちの生活にすっかり定着しているペットボトル。一回使ったらすぐリサイクルしてしまうのは、もったいない。回収、洗浄してリユースするための取り組みが、始まっています。



写真／坂本政十郎



パルシステムでは、リユース用のペットボトルを10回リユースする実験を行った。右が一度も使っていないパーソンのボトルで、左端が10回使用のもの。多少ボトルに細かい傷がつくが、充分使用に耐えることが証明された。



昨年の導入実験の際、回収、洗浄されるペットボトル。写真提供／パルシステム



回収後、ボトルに異臭がしないか、変型していないかなどを丁寧にチェックする、「官能試験」の様子。写真提供／パルシステム



ペットボトルは、すっかり私たちの暮らしに根付いている。軽くて持ち運びやすい、衝撃にも強いといった特長があり、国内で年間約54万トン（平成18年度）も販売されている。使い終わったボトルの66・3%が回収され、リサイクルも行われている。でもリサイクルされていけば、どんな作って、消費しても良いんだらうか？ リユースした方が、環境負荷は少なくなるのでは――。

実際、海外に目を向けると、ペットボトルはドイツをはじめ、世界20カ国以上でリユースされている。確かに日本でも、ビール瓶や一升瓶といったガラス瓶はそのほとんどが回収され、リユースされている。だったら、ペットボトルも……。

そこで環境省では、今年、ペットボトルのリユース実証実験に乗り出した。8月から、1・5リットルのリユース用ボトル入りミネラル・ウォーターを、スーパーなどの店舗販売と、パルシステム（食材の宅配などを行う生協のグループ）による宅配ルートとの、2つの形態で販売する。販売本数は約4千本。販売時には、消費者に返却をうながすため、10・20円のデポジット（預かり金）を上

乗せし、ボトルを返却するとデポジット分が返金される仕組み。店舗販売は自動回収機又はサービスカウンターで、宅配販売は宅配時にボトルを回収。専用が開発された洗浄液でキレイにした後、再充填し、11月にもう一度販売する。洗浄の前には、電子検知器及び目視で、汚損ボトルを除去するよう検査を行うなど、衛生管理は徹底的におこなう。実験は12月まで続けられ、消費者へのアンケートを実施することで、購買動向なども明らかにする。

宅配は、パルシステム千葉が受け持つ。すでにパルシステムでは、昨年、耐熱型ペットボトルを3回繰り返し使って使う実証実験も行っており、好感触を得ている。パルシステムの子会社で、リユースを中心的に進めている株式会社エコサポートの小沢一郎参与はこう話す。

「衛生観念の強い日本人はリユースを受け入れづらいのでは、という意見もありますが、環境意識が高まっている今、消費者はワンウェイよりもリユースを支持してくれるはず。この実験をきっかけに、リユースを日本人の暮らしの中に根付かせていきたいですね」

ケータイは、宝の山。



普及率が90%を超えた携帯電話。そのリサイクルを進めることによって、貴重な「鉱山」が生まれることとなります。

写真/富田寿一郎



福井県にあるリサイクル工場では、NTTドコモなどの携帯電話の専売ショップから回収された数多くの端末がリサイクルされている。焼却・破碎処理が行われ、別の工場で金、銀、銅、パラジウムなどの金属資源に生まれ変わる。

資源高を背景に、国内で廃棄される電子機器に含まれる金属が注目されている。こうした廃棄物の中にはさまざまな金属があり、取り出せば再利用できるため「都市鉱山」と呼ばれている。中でも高性能が進む携帯電話は宝の山で、そのリサイクルがスムーズにいけば、貴重な鉱物資源として再生する



買い替えなどで持ち込まれた携帯電話には、個人情報保護のためショップで破碎された上で持ち込まれる。

ことも可能だ。

携帯電話1台(約120グラム)には、約6・8ミリグラムの金が含まれていると言われている。1キログラムの金を回収するには約15万台(17トン)の携帯電話が必要だ。17トンもの携帯電話というと物凄い量だと思いかもしれないが、そうでもない。鉱山から金1キログラムを取り出すのには約1000トンの鉱石が必要となるからだ。こうして見ると、携帯電話は極めて優れた「鉱石」と言えるだろう。

しかし携帯電話の回収には、大きな問題がある。現在、回収は「モバイル・リサイクル・ネットワーク」によって行われている。このネットワークは、NTTドコモなど通信事業者と電話機の製造メーカーが運営しており、あら

ゆる使用済み携帯電話を全国約1万

400店の専売ショップで自主的に回収している。同ネットワークによると、回収台数は2000年度の約1362万台をピークに、2007年度は644万台に半減してしまっただけという。

その理由として、デジカメなど多機能化が進み、電話として使わなくなってもデジカメや目覚まし時計、アドレス帳として手元に置いておく人が増えたことが挙げられる。写真や、メール、留守電が残る端末を、使用していた当時の思い出として残しておきたいという人も多い。

「電話機としてではなくても活用していただく分には、広い意味ではリサイクルと言えますので、こうした機器をショップに持ってきてくださいますと言

えません」と、NTTドコモ社会環境

推進部の提案弘課長は言う。「しかしネットワークが行ったアンケート調査によると、『なんとなく保有している』と答えた人が63%もありました。今後はこうした層に呼びかける努力をし、少しでも回収数を上げていきたいと思っています」

NTTドコモグループで2006年度に再生された資源は、金が124キログラム、銀が352キログラム、銅が29トンだった。同社では今年の6月からコンビニエンスストアのイーエム・ピーエムの一部店舗に使用済み携帯電話の回収ボックスを設置するとともに、さまざまなイベントで携帯電話のリサイクルを呼びかけ、都市に埋蔵された貴重な資源を「採掘」していくという。